

の別荘へでも連れて行つて、完全に征服し得た時の歡喜に酔ひたかつた。

『改造社へ歸つたら、僕が金借りに行くからと、實彦君に言つといてくれたまへ、二三日僕は此の家に泊つて好いが』

文子のお母さんが出て來た。

世の中は思ひ通りには行かないものだ。

文子のお母さんは、春子一人を停車場へ見送らす事は出來ないと。

『四時の汽車で、少年も東京へ歸るから、一緒にお歸んなさい』と言ふ。

僕は春子を呼んだ。

彼女はどうしたら好いかと、心配して泣いてゐると、

少年は立つて靴を穿いたりしてゐる。

仕方がないの僕では

『それじゃ久さんと二人で見送らします』と言ふので妥協して、頭陀袋を春子に持たして、停車場まで行つた。